
誰そ彼の出会い

木立久美子

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

誰そ彼の出会い

【コード】

N8810D

【作者名】

木立久美子

【あらすじ】

神でも悪魔でもなく、人間ですらない。彼は闇色のマントを翻し、とつぜん僕の前に現れた……。。

僕はいつも1人だった。

最後まで1人でいるつもりだった。

それなのに、突然現れた1人の道化師が、それをぶち壊してしま
ったのだ。

白い光をたたえる薄暮の中で、彼が纏う闇色のマントは、翻るた
びに周囲の色を際だたせた。

僕は呆然としてそれを眺めた。

彼は、にこにここと愛想笑いを浮かべながら、まるで僕を以前から
知っているかのように親しい口調で、こう話しかけてきた。

「ごきげんよう。」

あなたはなかなか珍しいものをお持ちですね。

そして、

とても変わった場所に立っておられる。

不思議な方だ。

そこから何が見えますか。

見たいものが見えますか。

ねえ、

ばかなことを考えるのはおやめなさい。

考えれば考えるほど、

人は何も見えなくなるのです。

そう例えば、

自分の存在価値とかね」

僕は何も答えなかった。

もともと喋るのは得手ではなかったし、いきなり目の前に現れたこの男が、一体何を言っているのか、あまりよく理解できなかったからだ。

男はそんな僕を見て、くすくす、と無邪気に笑いながら両腕を広げた。

そしてダンスを始めた。

「何も難しく考えることはない。

ひどく簡単なことですよ。

私にあなたの真似が出来ないのと同じように、

あなたにも私の真似は出来ません。」

くるりとターンして、真っ黒な道化師はにっこりと笑った。

冷たいコンクリートの上で、踊りながら話すその姿は、滑稽を通り越してもはや不気味だった。

「おや、理解できませんか。

つまりはこういうことなんです。

私はあなたになれないし、

あなたも私にはなれないのです。

誰かの代わりなんて、

誰にも務まりはしないんですよ。」

そう言つと、道化師は大げさに溜め息を吐きながら、胸に手をあてて空を仰いだ。

「 ああ、
人とは無力な者ですねえ。
世界にはこんなにも沢山の人がいるというのに、
その中の誰も、
あなたの代わりになれないんだから！」

こちらの息が詰まるくらい悲壮な表情を浮かべたかと思うと、次の瞬間にはもう笑っている。
くるくると変わる道化師の表情は、僕をからかって遊んでいるようにも見え、しかしその実、僕とは全く別の次元に存在しているようだった。

この世ならぬ者が、気まぐれに舞い降り、気まぐれに僕に話しかけているだけなのだ。

もしくは、僕の妄想が作り出した、ただの取るに足らない幻なのかもしれない。

目を閉じれば消えてしまうほどの、儂い影だ。
それなのに僕は、その黒い道化師から目をそらすことが出来なかった。

彼の話す内容に興味があったわけでは、決してない。
にもかかわらず、どうしても惹きつけられずにはいられなかった。
道化師は、そんなふう硬直している僕を見ると、それはもう面白そうに、けたけたと笑った。
真っ赤な紅を塗りたくった唇が、にんまりと弧を描く。

「 何も、
難しく考えることはない。」

闇色のマントを、ばさばさとまるで翼のようにはためかせ、道化師が呟いた。

次の瞬間、彼は僕の目の前にいた。

マントと同じ闇色の瞳の中に、真っ青なサファイアのような光を見つけ、僕は思わず息を呑んだ。

道化師が嗤う。

「ひどく簡単なことですよ。

つまり、

あなたはあなたしかいないということ。

あなたは1人で、

あなた以外のあなたは存在しないということ。

ですから、

他には誰もいないのです。

あなたは、

あなたの他には。」

ぞわぞわと何かが背筋を這い上がっていく。

僕は掠れた声で、来るな、と囁いた。

それを聞いた道化師は柔らかく目を細め、芝居がかった動作で肩をすくめた。

「誰にも、

あなたの代わりを務めることなど出来ません。」

まるで睦言のような甘い声。

もう一度、瞬きをすると、彼は既に僕から離れていた。

離れた場所で、くるくると回り、楽しそうに踊っている。

マントの中から赤い縦縞のズボンが見えた。

靴の先はとんがっていて、彼が踵を打ち鳴らすたびに、その靴はカンカンと小気味よい音を奏でた。

かん、かん、かん。

かん、かん、かん、かん。

かん。

コンクリートに反射した音が、何回も何回も、僕の耳を叩いていく。

規則的なそのリズムは、まるで心臓の鼓動のように温かく、それでいて無機質な硬さを併せ持っていた。

やがて道化師が首を傾げて僕を見た。

「わかりましたか。

つまり私はこう言っているのですよ。

あなたは1人しかない。

そして、

その穴を埋められる人間は1人もいない。」

ダンスを止めて、彼は静かに言った。

その頃には、もう僕は体の力が完全に抜けてしまって、立っているのがやっとの状態だった。

口もきけない状態で、ずるり、とその場に沈み込んでいくのを待つばかり。

道化師はそれを見ると、ああやはり私の言うことは正しいのですね、と嬉しそうに呟いた。

「それならば、

さあ早く、

その手に持った銃をお捨てなさい。

そんな人間ごときが作ったオモチャで、

あなたの魂が救えるものか。」

道化師が、今度はゆっくりと、僕に近づいてくる。

一步、一步。

ゆっくりと確実に。

僕の方へと、近づいてくる。

「あなたは哀れな人間だ。

そこから飛び降りたところで、

鳥のように羽ばたくことは出来ないし、

その銃で頭を打ち抜いたとしても、

苦しみから逃げ出すことさえ出来はしない。

ああ、

人とは可哀想なものですねえ。

死んでも生きても、

私のような存在につきまとわれる。」

僕は呆然とした。

現実感のない、まるでおとぎ話の世界に放り込まれたような感覚

だった。

いま自分は劇場の中にいて、遠く離れた席から彼の芝居を眺めているのだと、そんな気分させられた。

くすんだ灰色の視界の中で、赤と白の滑稽なメイクがやけに浮き立つ。

僕は無意識に、あなたは神なのか、と彼に問いかけていた。

彼は笑って首を横に振り、けれどそれに近い存在かもしれません、と穏やかな表情で呟いた。

「私は何者でもない。

ただの気まぐれな道化師です。

あなたのような風変わりな人間に出会うため、

光と闇の狭間を飛び回る、

ただの愚かなピエロです。」

がらんどうな屋上を、ひゅうひゅうと吹き抜けていた冷たい風は、いつの間にか止んでいた。

僕の手から、ごとつ、と小さな鉄のかたまりが落ちていった。

沈みゆく太陽の残滓が、周りに薄い影を作り出す。

その影の中で道化師は微笑んでいた。

そして僕の手を引いた。

「お立ちなさい。

生きるのです。

あなたが死んだら困るのですよ。

誰も、

代わりがないのだから。」

誰そ彼の出会い

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8810d/>

誰そ彼の出会い

2009年6月23日00時36分発行